**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第３４回　（２０１７年　０６月１３日）**

**・第３４回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」８頁９頁**

・📖 （読む）「師と弟子」　８頁下段Ｌ２３～９頁上段Ｌ１

*まず手に油をすり込んで、それからジャックフルーツを割れ。そうでないと、果実の粘液がてのひらにベタベタとくっつくだろう。*

（解説）

**インドの文化を学ぶと聖典や『福音』のイメージが深まる**

ジャックフルーツは沖縄のドリアンに似た結構大きな果物です。外はとげがいっぱいで、割ると、ねばねばとした粘液が出ます。それを直接触る手がベタベタします。

インドの人は、ジャックフルーツがとても好きです。熟していないときは、カレーなどに入れて食べ、熟すと果物として食べます。旬は５月６月です。私はいつも９月にインドに帰ることが多いので、２０年くらい食べていません。

ジャックフルーツは日本ではなじみがありませんが、インドではとてもポピュラーですので、シュリー・ラーマクリシュナのジャックフルーツの例のイメージがよくわかります。

聖典にはその国の文化が関係していますので、その国の文化を勉強しないと分からないことがありますね。

例えば『福音』では、ドッキネッショルについて、たくさんの話が出てきますが、実際に行かないと、シュリー・ラーマクリシュナの部屋やホーリー・マザーの部屋などは、写真を見ただけではイメージが沸かないですね。もし皆さんが、インドの文化を勉強しますと、もっともっとインドの聖典、『福音』のイメージは深まります。

・📖 （読む）「師と弟子」　９頁上段Ｌ２，３

*まず、神への愛という油を確保し、それから世間の務めに手をつけなさい。*

（解説）

今回の「ジャックフルーツの例」も執着、無執着についての例です。

インドでは、ジャックフルーツを切る前に手が粘液でベタベタにならないように、手に油を塗ります。

我々は、親戚や世間への執着でベタベタにならないために「神への愛という油」を増やして、我々自身を守らなければなりません。

**「神への愛」を増やし、一時的なものへの執着をなくす**

無執着になるということは、家住者のみなさんにとってとても大事なことです。なぜなら、**無執着にならないと、霊的に進むことができない**ですから。しかし我々には執着が出る可能性がありますね。

では、無執着、執着の定義は何ですか？

Aさん、あなたは結婚をして子供もいます。執着の経験はありませんか？

生徒「子供をそばにおきたいし、離れていると気になります」

そうですね。息子、娘に対してはいろいろ執着が出る可能性が高いですね。だんなさんにはどれくらい執着が出るか分かりませんが。（笑い）

執着については前回詳しく説明しました。一時的なものに執着すると、利己的で狭くなり、見返りを求めます。

そして、執着の大きな問題点は、誰かまたは何かに執着すると、神様から離れて神様のことを思い出さなくなることです。

皆さんの執着が出ないようにするために、「神への愛という油を確保」するために、ヴェーダーンタ協会に泊まることができます。

**神様は神様だけを愛する人が好き**

キリスト教、仏教、イスラム教、ヒンドゥ教、すべての宗教が例外なく、無執着の実践が大事だと助言しています。

なぜなら非実在のことに執着してそのことを考えますと、実在のことを考えることができないからです。

東と西に同時に行けないように、実在と非実在を両方同時に愛することはできません。混乱が出ます。一時的と永遠、有限と無限は正反対ですから。

一時的なものへの愛が増えれば増えるほど、神への愛は減ります。ある時は親戚など一時的なものに引き寄せられ、またあるときは神様に惹きつけられます。まるで綱引きのようです。

もしあなたが神様の信者になりたいなら、いつも神様のことを考えなければなりません。なぜなら、一番嫉妬深い存在は神様ですから。神様は「もしあなたが私を愛するのなら、私だけを愛してください」と、神様以外のことを考えられるのが好きではないです。

「もしあなたが本当に信者になりたいなら、私のことだけを考えてください」です。

まるでふつうの恋人同士のようです。恋人同士の彼が他の女性のことを考えると、彼女は怒りますね。

では、ふつうの恋人同士と神様の違いは何ですか？

恋人同士の人間関係は一時的です、永遠ではありません。それだけでなく苦しみや悲しみなど、問題や困ったことも起こります。

しかし神様は反対です。**神様を愛しますと、幸せ、喜び、至福が出ます**。結果が全然違います。

外から見ると、同じようですが、結果が全然違います。

**「神への愛」を深めて親戚の中に神を見る**

我々は神様と親戚の両方を愛し続けたいです。それも可能ですよ。でも、それでは霊的なレベルが進まないです。残念なことに、ほとんどみんなの状態が、それです。

しかし本当は、神様と親戚を両方好きになるということは、矛盾ではありません。霊的にけっこう進みますと、親戚の中に神様を見ることができる。神様は偏在ですから、自分の親戚の中にも神様はいます。

しかし自分の奥さん、だんなさん、娘、息子を本当は神様だと見ていますか？　それは簡単ではないでしょ。ふつうはできません。難しいです。しかしそう見ないと執着が出ます。親戚を非実在のものと見ているうちは執着が出ます。だからそのためにまず「神への愛という油を確保してください」と言っています。

最初は神様のことを結構考えて、神への愛を増やして、親戚の中に神様を見ることができるようになると、親戚と一緒にいても執着は出ません、問題ありません。

しかしそうせずに、霊的にならないまま、親戚と一緒にいると絶対に執着が出ます。

ベタベタの状態になります。もし、手がベタベタだったら、とても心地が悪いですね。

シュリー・ラーマクリシュナにはたくさん弟子がいましたが、そのうち出家直弟子は１６人だけでした。あとはみんな家住者でしたね。イエスもお釈迦様もそうでした。ですので、家住者の信者のためにその助言はとても大事です。残念なことに神様の信者になっても、親戚や愛するものの中に神様がいることを忘れていますから、執着が出ます。だから何回も同じことをシュリー・ラーマクリシュナは言っています。そうしないと絶対に執着が出て、その結果、絶対に困ったことや、苦しみや悲しみが出るからです。

神への愛は、ふつう出ないでしょ。いっぱい実践しないとその油は出ないです。その油はデパートで買えるものではありません。特別な油ですから。「バクティの愛」と言う特別な油です。実践をして増やしてください。

**「神への愛」について深く考察して印象を深める**

神への愛について深く考えてみてください。

ふつうの愛をイメージしますと、神への愛の深いイメージが出ないかもしれないです。浅い考えではなく、深く考えてください。

みなさん、愛の経験ありますでしょ。息子、娘、だんなさん、奥さん、お母さん、お父さん、友達、に対する愛の経験がありますね。

神への愛とは何ですか？

そのことを深く考えないと、あまり印象が出ないですね。もし浅く考えますと、簡単に流してしまいます。

そうではなく、何が本当の神への愛か、一つ一つの例を深く、例えば一日そのことについて考えることが必要です。

そうしないと、物語を読んでいるみたいで他人事のようです。

『福音』に「神への愛」と言う言葉が出ています。それをみなさん、読んでいますが、はっきりと理解して読んでいない。

聖典の勉強の大事な実践のひとつは、聖典を読むときはその深い意味を理解する、勉強することです。霊的な実践です。

**「神への愛」とは**

**本当の「神への愛」は、「神」というひとつの存在だけが愛の対象**ということです。それが本当のバクティです。

本当の愛、純粋な愛とは、神様だけを愛することです。

ふつうの人が一番愛する対象は、自分自身です。もちろん親戚も愛していますが、一番は自分です。『福音』の中にその面白い例があります。

**・本当の親戚は神様だけだと悟った例**

あるグルが弟子に「家族と離れて一緒に行きましょう」と言いました。弟子は「しかし私の父母や妻は私を深く愛しています。だから彼らを捨てられません」と言いました。するとグルは、「あなたの奥さんやお母さんは、本当はあなたのことを愛していません。それはあなたの心の幻想です。本当は神様だけがあなたのものです。人びとの愛は本当の愛ではありません」と言いましたが弟子は信じませんでした。そこでグルが言いました。

「帰ったらこの丸薬を飲みなさい。するとあなたは死骸のようになる。しかし意識はあるので、みんなの会話は全部聞こえます」と言いました。

弟子は家に帰って丸薬を飲んで死んだようになりました。母も妻も、他の人びともいっぱい泣きました。そこにブラーミンの姿をしたグルがやってきて言いました。

「私は彼を生き返らせることができる薬を持っています。しかしそれをまず他の誰かが飲まなければなりません。そして最初にその薬を飲んだ人は彼の代わりに死にます」と言いました。さらにブラーミンの姿をしたグルは「お母さんと奥さんはひどく泣いていましたから、それを飲むことをためらわないでしょう」と言いました。

するとたちまち泣き声はやみ、みんな黙りました。そしてお母さんは言いました。

「私には家族がたくさんいるので今は死ねません」

奥さんは言いました「私の息子はとても小さいですから、面倒を見ないといけません」

すべてを聞いていた弟子は突然起き上がって「師よ、私はあなたのお供をいたします」と言いました。　　　　　　　　　　☞（『福音』８２３頁下段Ｌ１７～８２４頁下段７参照）

分かりますね。

神様だけが我々を本当に愛しています。そう考えると神への愛ができます。神への愛がそれです。その理解がないと意味がないです。それが分かりますと、神への愛がどれくらいふつうの愛より高いか理解できます。

**神様は、一番身近で一番大きな愛をくださる永遠の親戚**

例えば、ある人があなたのことをたくさんお世話して、面倒をみて、心配してくれると、あなたのその人への愛は増えますね。他の人に対してより愛が増えます。

それと同じ論理で考えてください。

神様は我々の永遠の親戚です。（ふつうの親戚のみなさんと我々の関係は今生だけです）

神様と私の関係は永遠です。

神様は本当に私に一番近い存在です。

神様の私への愛が一番大きいです。

本当に素晴らしい関係です。そのことを理解しますと愛が増えます。

**神様のすることはすべて我々の善のため**

**Whatever God does, does for our good.**

すべてのできごと、すべてのものは神様の意志だけでできています。そして神様がすることすべては、本当は我々の善のためです。ときどき神様は大変な状態を我々に与えますが、それも本当は我々の善のためです。大変な状態になると、我々は信仰をなくして神様に「神様、どうしてそんなに大変な状態を作るのですか」と訴えます。

しかし、本当の信者はその大変な状態が神様の愛から出ているもので、神様が我々を教えるために、最終的に我々の善のためにその状態を作ったと考えるので、なにも気にしません。そのような信仰が神への愛です。

ふつうの愛はすぐ壊れます。人間同士の愛は、もし少しでも大変なことがあったらすぐに終わります。しかし神様がどんなにたくさんたいへんな状態を作っても、本当の神への愛があれば、神の信者は何も文句や愚痴を言いません。逆に神様に「もっと大変な状態が欲しい」と言います。なぜなら、もし楽な状態になると神様のことを忘れる可能性があるからです。

「大変な状態の時はいつも神様を思い出すので、私は大変な状態が好きです」

そのように考えます。それが本当の愛です。

**信者はすべての人の中に神を見るので区別しない**

神様は宇宙を創りました。良い、悪い、聖者、罪びと、それらすべてを神様は創りました。創っただけでなく、神様はすべてのものになりました。すべての人、すべての存在になりました。とても深いですね。神様への本当の愛で、それくらいの信仰、理解が出ます。

ふつうの人の考えでは、聖者と罪びと、良い人と悪い人を区別しますでしょ。しかし本当の信者は区別しません。すべての中に神様がいると考えているからです、神様には限度がありませんから、すべての中にいると考えても矛盾ではないです。

すべての人の中の神様のことを考えて、できるだけお世話をします。そうしますと、本当の幸せ、至福、穏やかさ、などすべてが出ます。　そしてさらに神様を愛します。

**一番深い神への愛（愛のための愛）**

しかしもっともっと純粋な神への愛は、神様からの見返りを考えません。

ふつうの愛では私が愛すると相手からも愛されたいと、見返りを求めますね。

神への愛も、最初は見返りを考えます。

至福が欲しい、サマーディが欲しい、解脱したい。そのために神様を愛します。

しかし、だんだんと進むとその考えは出ないです。

Love for the sake of love.　愛のための愛。至福もサマーディもいらない。これは、とても高いレベルの愛です。

私は神様のお手伝いがしたい。見返りのことを全然考えないだけでなく、反対に神様をサポートしたい。

**・一番高い信者の例①（トラに遭遇した人の例）**

３人の友達が森に入りました。すると森の中から突然トラが現われました。

最初の友達は、「おお、我々はすぐに死んでしまいます」と言いました。なぜならその人は、守ってくださる神様がいることを知らなかったのです。

次の信者は、「神様に祈りましょう、神様、面倒をみてください！」と言いました。

３番目のいちばん高いレベルの信者は「こんなことで神をわずらわせたくない。だから木の上に逃げよう」と言いました。　　　☞（『福音』１７９頁Ｌ１～Ｌ１５参照）

３番目の信者は神様が自分たちを守ってくださるためにここまで来なければならない、そのような面倒をかけたくない、と考えたのです。その信者には本当の神への愛がありました。

このような一番高いレベルの神への愛は、最初から出るわけではありません。だんだんレベルアップして最終的な理想はそれです。全然ふつうではありませんね。

**・一番高い信者の例②　（ラーダーのシュリー・クリシュナに対する愛の例）**

ラーダーはヴリンダーヴァンに住むシュリ―・クリシュナの一番の信者です。彼女はmilkmade、乳搾りと牛乳で作ったものを売る家族の娘でした。

シュリー・クリシュナが王様の時のできごとです。あるときシュリー・クリシュナが病気になりました。ホメオパシー、中国の伝統的な医者、ヨーガの先生、いろいろなお医者様が治療しましたが治りませんでした。そしてシュリ―・クリシュナは言いました。「私の病気が治る方法がひとつだけあります。私に信者の足の塵を飲ませると、私の病気は治ります」

ふつうは皆さん、神様の足の塵が欲しいですね。インドの文化では、神様の足にタッチしたものが欲しいです。しかし信者の足の塵をシュリー・クリシュナに飲ませると、飲ませた人は大きな罪を犯すことになる可能性がありますでしょ。だから誰も同意しませんでした。神様に対してそんなこと出来ないですね。

そのときラーダーがそのことを聞いて「私は喜んで自分の足の塵をシュリー・クリシュナに飲ませます」と言いました。

ラーダーはその結果で自分が大きな罪を犯すことになり地獄に行っても何も気にしないのです。シュリー・クリシュナの病気を治すことだけが彼女の目的です。

ラーダーは見返りのことを考えないだけでなく、神様を助けることによって自分が困ることになっても、全く気にしません。　　　　　　☞（『福音』８１９頁　上段Ｌ８～１２）

**神様と繋がっている状態で人間関係を作る**

神様だけが本当の私の永遠の親戚

神様がすべてを作り、神様の意志ですべてのできごとが出ています

神がすべてのもの、すべての存在になっています

楽な時も、困った時も、いつも神様だけが私の避難所です。

そう考えて神様を愛する、これがバクティです。

このようなバクティは突然でないので実践が必要です。まず心の準備をします。神様が我々の人生の中心であることを理解します。

人間関係も神様と繋がっている状態で作ります。

例えば、「だんなさんの中に神様がいて、私はその神様をお世話します」と考えてだんなさんのお世話をする。

それが神様と繋がっている状態で人間関係を作るということです。

そうしますと執着は出ないでしょ。無執着になります。

神様と繋がっている状態で人間関係を作るには、まず神への愛を増やさないといけないです。そしてそのように人間関係を作ることができたならば、森や洞穴で、一人で修行をする必要はなく、親戚と共に暮らしても大丈夫です。親戚への執着は出ません。

しかし、もし神様のことを忘れて、親戚を人間だと考えると、親戚のイメージが大きくなります。そうしますとまた、執着が出ます。

神様を親戚の中に見るのはそんなに簡単ではないです。すぐに忘れます。

皆さんは簡単に、「私は信者ですから、問題ないです。好きな人の中に神様を見て愛します。人間関係をつくります」と考えます。しかしすぐにそのことを忘れて好きな人の中に神様のイメージはなくなって、人間のイメージが深くなります。だから気をつけないといけないです。心はいつも我々をだまします。心はとてもいたずらっ子ですので気をつけてください。

大事なことは、まず、実践してください。ときどき親戚から離れてください。そして神様を愛する安定した状態になってください。たくさん実践した後に神への愛は深くなります。

（第３４回『福音』勉強会　以上）